慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福井市立図書館蔵『伊勢源氏十二番女合』翻刻
Sub Title	
Author	中島, 正二(Nakashima, Shoji)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1994
Jtitle	三田國文 No.21 (1994. 12) ,p.18- 31
JaLC DOI	10.14991/002.19941200-0018
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19941200-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福井市立図書館蔵『伊勢源氏十二番女合』翻刻

中島正二

福井市立図書館蔵『伊勢源氏十二番女合』に関して、「福井市立図書館蔵『伊勢源氏十二番女合』について」（『汲古』第二六号　一九九四年十一月）において、書誌的な報告と若干の考察を述べた。詳細は、それを参照願いたいが、そこで述べたごとく、福井市立図書館蔵本は、伝本中最古の写本であり、内閣文庫本や群書類従本の脱落部分を補訂でき、また、内閣文庫本と群書類従本の奥書にその名の見える「柳原資定」の筆とする極札が貼付されており、本文の上でも諸伝本間の関係を考える上でも、非常に重要なものだと思う。そこで、全文を翻刻することにした。

御所蔵本の閲覧ならびに調査の御高配を賜った福井市立図書館関係者各位に、厚く御礼申し上げる。

＊　　＊

書誌

函架番号、別一―一・五―三九一。〔室町末期〕写。袋綴一冊。紺地木槌等模様金繡裂表紙、竪二三・二糎、横一六・八糎。料紙、楮紙。外題、中央・白地金泥花模様題簽「十二番哥合」。見返し、金切箔金泥山家模様。墨付、三六丁。毎半葉、一〇行。字面高さ、約一九・七糎。遊紙、前後各一丁。前遊紙表に「柳原殿資定卿　十二番」の極札貼付。奥書はなし。なお、「越國／文庫」の朱の印記があり、旧藩主松平家寄贈図書であることが知られる。

＊　　＊

翻刻にさいして、読解の便宜のため、私に句読点を付した。漢字はおおむね通行字体に従ったが、「哥」はそのままにした。底本では、和歌は二字下げで、終わりはそのまま本文につなげて書かれており、そのおもかげを伝えようと思い、それに従った。不審な箇所には「ママ」と傍記した。

＊　　＊

ちかきみよのおほむことにもや、二月十日あまり、南殿の花さかりに、ふくかせもおりをしえたるのとけさなるへし。君もうつりきこえたまへは、大きさいの宮をはしめ奉て、女御、更衣おはしますかきりは、さふらひ給はぬも侍らす。かく人なとめしいてゝ、みち〳〵にたれるは、みなえりすくらせ給へは、いと竹のこゑは雲井をひゝかし、まひ人なとも、きよらをつくさせ給。袖さしかさせるすかたともは、紅葉のかけには侍らねと、けふはあはれともたれかは見侍るらんと、の給て、君うちゑませ給へは」（1オ）、女房のかきりはこたへまうき御けはひなるにこそ。御かはらけまいりて、花有喜色なりなといへる題、ひたふるにつかうまつる。からのやまとの打ませて、日ねもす、なかめくらし給。あすもと契りけむときか花ならても、月はけにやとりかほなりけり。大宮より大納言君といへる女房めし出て、あすもかく御覧せんなるへけれは、めつらかなる御あそひの、こひねかはるゝあまりに、ふるき物かたりにあらはれ侍る女を、つかひさためて、つかさ、位をいはゝ、なにのあらそひかは侍らん、たゝしな心の時によれらんふし」（1ウ）ふしにつけて、しゆうを奏し給へとて、御硯めして、左伊勢物語、右は光源氏に侍る人々を十二つかひにさため、御心にうかふにまかせて、みつからあそはしてたふ。大納言君給て、物をあはするためしはおほかるめることなから、あるは絵、あるは哥、にほひ、あふきなと、折にふれ、ことによそへて、かちまけはあはなむかし。とをき昔の人を、いかさまにか引くらへをしはかられ侍なむと、をろかなる心のやみはかゝるみちにもふかゝりけり。かしこきおほせことの帰るためしのあらまほしうとて、かたはし〳〵いひさため」（2オ）侍らは、ふりにし玉のみかゝぬかたのうらみは、いと空おそろしからすといふことなし。

一番

左　五条大后宮　勝

右　桐壺更衣

左は文徳天皇の大后宮にて、君のかしこうおはしますにしたかひて、世をなて民をめくみ給ふこともあさからす、君をしもいさめ奉り給のみ也。しうの文王の后ひは、其み世をたもちたまはむことをねかひて、世をやすんすることは人をうるにあり」（2ウ）人をうることはえむにしかしとて、ゆへある臣下のむすめことにこひとりて、御門に奉られけると也。かゝるためしまてひきおほさるゝにや、み心たて、御すかたのやむことなきゝはにつけても、いひなすらへかたし。世継の物かたりなとにも、この君をは花にたとへ奉るにこそ。ちゝの君の老をさへのはへ給はかりも、あらぬ名をしもとりそへ給。この御腹に王子生れさせ給て、ひとさふくらゐにつかせ給、いともめてたし。右はきりつほの更衣、ちゝは大納言なとにてうせしにや、たつきなうなり行まゝに」（3オ）御宮仕にうちへまいられ侍しを、みかと、ときめかせ給て、とし月はこなたにて明し暮し給。かたへの人、みなそねみおもひ給へらぬも侍らす。人のくにゝも、ことのおこりにこそ、世もみたれあしかりけれと、やうやう、あめかしたのもてなやみくさとなり給。ほとなう王子うみ奉り給。この御子、ひるこの御よはひのほとにや、御はゝの更衣なやみ給ことありき。をこたりもやり給はて、夏の比はいとしもをもうわつらはせ給へは、御さとにまかてなむとし給。御門こ

二番

左　二条后宮　持

右　薄雲女院

右、此女院は、きりつほの更衣かくれ給て後は、朝夕の空をたにわきまへかたう、ひたすらにおほしほれ給て、御枕をとらせ給ても、たれとともにかと打なけかせ給て、あさまつりことはたゆみ行のみなれは、みよもあきらかならしなと、歎きさはき侍て、いかにしてもかなと、この君をもとめ奉り（けれは）○折ふしはなくさめ聞え給かち成にけり。十に四五あまり」（5ウ）給ほとの御よはひにて、御かたちも、をのつからかゝやくやうにおはしけれはにや、かゝやくひの宮と申けると（そ）か。藤つほにすませ奉り給てやう〳〵昔にかよふ御さまなりけり。ひかる君も、まことの御おやめきて、朝ゆふなれつかうまつり給。かたみにいはけなき御心に、あそひかたきに物し給て、あふけなうおもひかはし給。としへても君はえしらせ給はて、御子なとうみ奉り給をは、とりわきてかなしうし給けり。おとなひ給にしたかひて、源氏の君にいとようかよひおはしませは、世人も心しれる」（6オ）とちは、かたはらいたきことにおもひ奉らぬも侍らす。母君も、かくうたて侍るすちなれは、それかあらぬかにいひたとらるゝしもこそ、すこしはつみあさかるへきわさなめるを、かうまてひたみちにうつし給へるあさましさなと、打なけきて、源氏の君、

よそへつゝみるに心はなくさまて露けさそふるなてしこの花、此君、ほとなふ位におはしましては、源氏の君そ、世中の道はとりはからひ給し。けに母かたからこそ、みかとの御子も

との外になけきしつませ給て、かね〳〵は后の位をたに」（3ウ）もとおほしめしなから、世のそしりもかと、うちすくひこしをなとの給て、手くるまのせんしかうふらせたまふ。更衣、

かきりとてわかるゝ道のかなしきにいかまほしきはいのち成けり、かくてつるにかくれ給。うちには、ひたすらの御なけき、玉の行ゑのしらまほしう、まほろしゆかしきみ心成けりとそ。若宮、御ふくのまは、御うはのあま君くし奉て、野分にあれたる草の庵は、ならひにこえて露けき秋なるへし。内には此宮の御うへさへおほしくわへ」（4オ）奉り給ひて、命婦の君してあま君のもとにたまはせける。

みやきのゝ露ふきむすふかせのをとにこはきかもとをおもひこそやれ、御返し、

あらき風ふせきしかけのかれしよりこ萩かうへそしつ心なき、御ふくはてぬるまゝにまいり給て、弘徽殿の宮の御やしなひのやうにておひ立給。七さいの春、ふみの道に入そめ給。こまより、さう人まいれしに、鴻盧官（マヽ）にてあはせ奉り給て、行末かけての御さかへまて、うらなひさため、御かたちの」（4ウ）ひかるさまにおはすめれはとて、光君となつけ奉り、かのせいわうのためしをうけ給て、十二にてうゐかうふりして、みなもとの姓をたまはり給。冷泉院の御宇に、大上天皇の位給て、六条院と申けるにや。かくやむことなう、さえ、とくに付ても、天下をおとろかし給ふ君の母にて、所せうおもひ給へ侍れとも、そのみ世にも、こゝらねたみおほされし更衣なれは、けふの御あそひにえらはれ侍る判者にて、かしこき宮のみかけを、いかてかあふきたてまつり侍らさるへき」（5オ）

きはゝおはすめれなとおもひしりぬ」（6ウ）左の宮は、いとおさなふおはしましけるより、春宮へまいり給へきにて、いつき奉るに、中将成けるおとこ、わりなうおもひかけ奉りて、とかくいひわたりけれは、御おやはらからなとも、ふかうせいしけれは、世中をおもひうんして、人のくにゝかくれゐぬ。さりても、よるはさすかによひなから、いたつらなりけるにや、

いたつらに行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ、なとそ、うたひける。かくてもせむかたなけれはにや、忘るゝことをたにとうちねかひて、佛かみにも祈つゝはらへさま〴〵○侍しかと」（7オ）ありしよりけに戀しけれは、

戀せしとみたらし河にせしみそき神やうけすもなりにけるかな、うちにおはしましては、君の御おほえあさからぬ御なからひにて、御いとこのみやなとも、ひたみちにかしつき奉り給へは、なを世の光はみえそひ給にや、貞観の末に皇子うみ給て、又のとしのほとにや、皇宮にたち給。此つかひは、いつれもやむことなきすちなから、いさゝかのくまもましらひ給うへ、そのしなゝ〳〵もおなし風情に侍めれは、よき持ておはしましなむかし」（7ウ）

三番

左　有常女君

右　紫上　　勝

左、中将の父の親王、紀有常か家なと遠からぬ程なれは、おとこも女も、いはけなきまゝに、うちいさなひなとしてあそひけるか、春秋の花もみちにつけても、色ふかきさまに行するかけてちきりかはしけるに、もろともにおとなしうなりてのよは、女のおや、いにしさまにもゆるう心とも侍らぬを、はゝなむ心あるさまにけしきはむおり〳〵もありける」（8オ）にや、さてよめる、

みよしのゝたのもの雁もひたふるにきみかかたにそよるとなくなる、おとこ、よろこひて、かへし、

わかためによるとなくなるみよしのゝたのもの雁をいつかわすれん、いかなる○折（けるに）か、女、

あま雲のよそにも人のなり行かさすかにめにはみゆる物から（二字ムあるヘシ）おとこ、返し、

あま雲のよそにのみしてふることはわかゐる山の風はやみなり、と侍るは又おとこある人とかけり」（8ウ）かゝれはにや、人のくにゝ人もとめてまかりかよひけるに、女も、はたおなし心にいてたちやりなとすめれは、おとこ、いふかしうおもひけるか、又いぬるかほして物のくまに、すみ見れは、いとようけさうして、夜ふくるまてことかきならし、うらみくひてぬとて、

風ふけは奥つしらなみたつた山よはにや君かひとりこゆらん、此君そ、おとこのいまはの時にも、さき立てこそやみちのひかりにもと、打たのまれ侍るに、すてはて給てんやと、歎けれは、おとこ、

しるやさはわれにちきれる世の人のくらきに」（9オ）ゆかぬたよりありとは、さもゆへありかほなりや。右、此上は御母には、いとはやうをくれ給て、うはのあま君そ、おゝしたて給ふ。源氏の君、さるゆへありて北山そうつの坊にわたり給ことありけり。此うは君も僧都にゆかりある人にて、つねはねん

すのために此山にかよひすみ侍けり。さることには、ひめ君をもあひくし奉り給ふ。けんしは、つれ〳〵のあまりに、見なれたまはぬ山里すみのさま、いふせくもめつらかにもおはしけるか、かのもこのもたちより〳〵して、のこるくまなくやすらひて御ともの」（9ウ）人々に、かしこはこゝはとたつねしらせ給に、おなし柴かきの庵なから、木たちよしありておかしくみゆるあり。これみつをめしてとはせ給へは、むかし、こあせちの大納言とかいひし人の北のかたは、此そうつのいもうとなめるか、京にもかつはすみなから後の世のたのもし所なれは、おり〳〵はこゝにきかよひ給。又おさなういとうつくしき女君のましますは、兵部卿宮の御むすめ、あま君のまこ也と、かたり奉る。君、さらはなをよく見てむとて、さしのそき給へは、けになへての人とはみえ給はて、おひいてたま」（10オ）はむ山くちはしるかりけりと、まつ御心の空めかしきそ、御くせなりとみゆ。そうつにもあま君にもほの〳〵うちいて給ふ。

はつ草のわか葉のうへをみつるより旅ねの袖も露そかはかぬ、あまきみ、返事、

枕ゆふこよひはかりの露けさをみ山のこけにくらへさらなむ（一字分あき）君はひめきみの御事、いとも〳〵の給をきて、たち帰りなむとし給も、なこりすくなからぬ山さとなりなむかし。

夕まくれほのかに花の色を見てけさは」（10ウ）かすみのたちそわつらふ、御むかへとて頭中将、さ中弁、さらぬ君達なとみちき給て、うちよりのおほせことなとさま〳〵にていさなはれかへらせ給ふ。又のあしたより御つかひまなふ山ふかき御うしろめたさ、いひもやり給はす。かくて月ころふるまゝに、うは君もかくれ給へは、京の上に御めのとの少なこんなと、ひとりふたりしておはしけるを、ちゝ宮の御かたみにうつろはし奉らんとするをいひつたへ侍りけれは、とみの御ことに二条院へむかへとり奉りてかしつき給。御こと、てならひなと、をしへ聞え給へは」（11オ）ほと〳〵しう御むすめのさましてそひ給ふ。

てにつみていつしかも見む紫のねにかよひける野へのわか草、と侍る比ほひよりそ、なま心つき給ふ御心ちはせし。後はあまたの御中にひとり御おほえはしるかりける。すまの御たかひめなとにも、此上の御ことのみそ、朝ゆふの御歎くさには、おほしけるとなり。御子なともおはしまさねは、いとわかう物し給しより、ほとけのみちにすゝませ給て、みつから千部の法花経かきたて給て、いかめしうくやうし給。此つかひ、左もすかた心のえんなるかたは」（11ウ）世になきさまに聞え侍るを、我ゐる山のと侍る言にいさゝかのふしをこめ侍る也。物をあはするならひ、吹毛のなむをもとむるなるへし。たとへまふとちのたはふれことにし侍れかし、つみにはのかれかたきかうへ、右は、いもせのなかにとりて、よとゝもに何のゆへかは侍らんなれは、かちにとおもひ給へらるゝはいかゝ。

四番

左　戀死君

右　葵上　勝

右の上、大きおとゝの御むすめ、宮はらにたゝ一所お」（12オ）はしましてかしつかせ給へは、ひかる君、源氏の姓を給て○日（の）と（よ）り、みかとの御はからひにてむこにならせ給。うちたえあひす

み給て、いとよき御なからひなり。あにの頭中将、おなしさまにおひ出給て、紅葉賀の舞なとにも左みきりにておはせしを、みる人はうらやみ奉て、おなし人と生るゝともみめ心の世にすくれてよしといはるゝためしは、昔のつみかろきにて、行すゑの佛の心にもちかゝるめるなと、この御ふたかたそ、世中のかゝみにはいひもてはやしける。うへはいと御心をもりかにおはしまして、なれは」（12ウ）ゆき給にしたかひても、人をはおそろしうはつかしきことにおもひかまへて、物なと打いひ給にも、ふとさしたにもいらへす、おもてうちむかひては御かほのいとあかみ給てみえ侍るも、いとおかしき御心なりかし。源氏、わらはやみにつけて北山へおはしまして歸給にも、れゐのはいかくれて、とみにも、えいてたまはぬを、おとゝ、せちにきこえ給へは、やゝしてわたり給へり。ゑにかきたる物のひめきみのやうに、しすへられて打みしろき給こともかたく、うるはしうて物し給へは、おもふこともうちかすめ、山里の物かたりをもきこえむ」（13オ）いふかひありておかしう打いらへ給はゝこそ哀ならめ、世には心もとけす、うとくはつかしき物におほして、年のかさなるにそへて御心へたてのまさるもくるしきに、時〳〵はよのつねなる御けしきをも見はや、たへかたふわつらひ侍しをも、いかゝとたにとふらひたまはぬこそめつらしからぬことなれと、なをうらめしうときこえ給へは、やをら打そむきて、とはぬはつらき物にやあらんと、しりめに見おこせ給へるまみ、いとけたかううつくしけなり。さるに御子うみ給て、いくほとなう打なやみたまひかちなり。世のさはきとなりて祈」（13ウ）さま〳〵侍れとも、をもき御物けにてつゐにかくれ給ふ。かの宮す所より、

人の世をあはれときくも露けきにをくるゝ袖を思ひこそやれ、御返し、源氏、

とまる身も消しもおなし露の世にこゝろをくらんほとそはかなき、わか宮を御かたみには見奉り給て、

霜かれのまかきにのこるなてしこをわかれし秋のかたみとそみる、御歎にしつませ給て、又、

なき玉そいとゝ悲しきねしとこのあくかれ」（14オ）かたき心ならひに、左、父おとゝなとも此君をはあまたの中にとりわきて、かなしき物におもひかしつきけるに、ふとれゐならすおはしましそめて、をもりそひ給へは、まとひてくわんたてなとせしかと、そのかひなし。いまはの時となりて、かゝる人をおもひそめて、ほとふるまゝにくつおれ侍るなと、かたりけれは、おやなむつたへ侍けれは、おとこまとひてきたりけれと、うせはてぬ。えにしのほとかなしみて、日かすをこもりけり。みな月の比なれは、夜ふけていとすゝしきに、ほたるのたかうとひかふを見て」（14ウ）

とふほたる雲のうへまていぬへくは秋かせふくとかりにつけこせ、この段、ことに勝負わきかたし。むかしの哥合なとをみるに、あふ戀とあはさる戀はさしならへて、あふかたをかちとすなるためしも侍にや、左、戀しに給へらん心さしのほと、あはれにも忝もおもふ給へ侍りなから、ふるきれゐなきにしも侍らねは、右を勝とさため侍也。左のまうしう、猶はるけかたからんかしやと、なみたをもささへかたきにこそ。

五番

左　夢語君」（15オ）
右　朧月夜内侍督　勝
右の内侍は、春宮の御母弘徽殿の御いもうと、けふの花のえん見給はんとてまうのぼり給。二月廿日はかりのことなれは、よひはほのくらしおかしきに、こうきてんの三の戸わたりをたゝすみ給に、うちよりわかやかなる御聲の、いとなへてならぬして、おほろ月よにしく物はなしと、打すんしけるを、源氏さしよりてかひいたき、やをらかくれ給。女君はつふ〳〵と打さゝやき給へとかひなし。明行まゝに夢の心ちして、

うき身世にやかてきえなはたつねても草の」（15ウ）はらをはとはしとそおもふ、かくてしのひ〳〵にかよひ給ふ。この君は春宮へまいり給へきなるを、かゝる疵さへいてき給へは、御まま母の后宮もいきとほり浅からて、こ院かくれさせ給て後は、春宮にもことのよし申させ給て、源氏をすまへうつろはしたてまつり給ふ。かのうらへも、

涙河みなはもうきて消ぬへしなかれて後の世をもまたすて

又御めのとの中将のかたへ○、すまより、

こりすまのうらのみるめも床しきにしほやくあまよいかゝおもはむ、左、夢語のきみ、はしめは」（16オ）たゝ人のつまにて侍しやらん、後はやむことなきかたにおもはれ給て、子なとも侍しにや、これもはかなきことはりにまかせてたえはてぬ。此中将の君をいかてと思しかと、さなむいはんもすへなきにや、まことならぬ夢かたりす。源氏、紫の上の御ことを僧都にうちいて給しにも、このことはゝみゆ。中将は、おもひおもはぬ心なけれは、きてねにけり。又いかなるおりにか、

百年に一とせたらぬつくもかみわれやこふらしおもかけにみゆ、右は、花のえんにあひ初し内侍の、けふにめくらひ侍るは、いとめつらかなる興なるへし」（16ウ）左はいさゝかさたすきたるかたに見なれ侍れは、すひおうのかうへの霜に似たるをにくむとかや侍れは、ふるきこと葉になすらへて、かたふき侍にこそ、右をかちとする。

六番
左　小野小町　勝
右　女三宮

右は、朱雀院御心なやみ日にそへておもり給へは、御世を春宮にゆつり給。女宮ふた所おはしましけるを、御いとをしみなのめならす、いかさまにかなりてもはて」（17オ）給はんとすらんなと、うち歎かせ給て、二宮をは柏木右衛門督、三宮をは六条院、御うしろみうけ給り給ふ。三宮は、ことに御かたちも世になうえんなるかたにおはしませは、御佛の御さうなとやう〳〵きこえあるさまなるへくとも、この御すかたにてや、をしはかられ侍らんなむ。けに青柳も朝露にうちなひく影は、いかなる花にかは、け○され侍るへき。めのまへに、さとうちおほふ心ちせらるゝ、院もいとかしこう思かはし給けるに、かしは木の右衛門督、物のたよりにふと見初奉て、しつ心なう思わたりけれは、御めのとのしゝうにかたらひて」（17ウ）おり〳〵の御ふみなとかよひけるにや。此比は紫上なやみ給て、院もひたすらこなたにおはしまして、すこし御心きよけなれは、宮の御かたにわたらせ給。おもひかけす入き給めれは、とりみたる物ともこしらへあへす、督のふみなと、しとねのしたにかいくるみ

てをけるを、院見つけ給に、さた〳〵とことあらはれてかける文なりけり。とりてかへらせ給のちは、まことの御心さしもえおしまさす、御子をさへうみ給へは、御身にもくやしきことの御歎のみなるにそ。御うふやなとには、わか御子のことくたひ〳〵おはしまして、いかの御ゆはひ」（18オ）に若君をいたき奉りて、宮の御みゝにあてゝ、

たか世にかたねをまきしと人とはゝいかゝ岩ねの松はこたへん、宮は、かひふしてきえいり給。督にもかゝること、けしきはみ給へは、物やみになりてつゐにうせ給ぬ。いまはの時にしゝうにつかはしける、

いまはとてもえんけふりもむすほゝれたえぬおもひのなをやのこさむ、宮、御らんして、

たちそひてきえやしなましうき事をおもひこかるゝけふりくらへに、宮は、ちゝの御門にも御いとま申させ給はて、御くしおろして、入道の宮と申しき」（18ウ）左は、色好の家なるへし。さるへくは、なからひのかたにとりては、右に申くらふへきかたも侍らす。すかた、心の世にすくれ、やまと哥の道にさへなへての聞えにも侍らす。ちはやふる神代にはしま○（れ）るわさなるを、ふるき物のことはに、いにしへのことをも哥の心をもしれる人、わつかに独ふたりといひて、すなはち小町をくわへたり。人のくにゝも女はみめ心につけて、かしこきかたの聞えは侍めるは、はまのま砂のことくなれと、道にとりては、あるは絵あるはもしなとには見え侍れと、からの哥なとにもその名にたかき」（19オ）はまれなるやらん。むかしは、いさなみのみこと、あなにかやとなかめ、下てる姫の、あもなるやをとたなはたのとよみ、近き世には、そとをり姫の、くものふるまひといひ、うねめか、あさか山と侍しは、あさからぬ心にもそ侍るらむ。又、こゝらのせんしうなとにみえ侍る女の名は、あけてかそへからす。彼古今集は貫之御ゆるされにあつからすは、はたあるへからす。ひとり古今のあいたにあゆむなと、ぬしなき詞にしも侍らねと、女のうへにひきとりては、こまちにやゆつり聞えたまひつらんかし」（19ウ）

七番

左　前斎宮女御

右　槿斎院　　勝

右、あさかほはかものいつきにゐ給しより、源氏、神のいかきのうちまての給わたり侍しかとも、つれなくすくし給。父宮かくれさせ給に、とふらひなと申給とて、

人しれす神のゆるしを待しまにこゝら常なき世をすくすかな、御返し、

なへて世のあはれはかりをとふからにちかひしことは神やいさめむ（一ぎかき）　又源氏」（20オ）

みしおりの露わすられぬ朝かほのはなのさかりは過やしぬらん、かくはの給ひつくし給へとも、つれなきかきりには此君を申侍るやらん。ちゝの御あと桃そのゝ宮ゆつりえさせ給て、おこなひすみ給とそ。左は、かの中将、うちの御つかひにて伊勢にくたり給。后宮の御かたより、つねのつかひよりはよくいたはれなと侍しかは、ねや遠くさしもえはなたさめれは、ねひとつはかりに女きたりて、うしみつまてかたらふ。さて明はてゝ女のもとより」（20ウ）

君やこし我や行けむおもほえすゆめかうつゝかねてかさめてか（ござんあるき）返し中将、

かきくらす心のやみにまとひにき夢うつゝとはよ人さためよ、神○（の）いさむる道ならすとか侍るなれは、さしも思給へらぬを、かのたかはし氏に玉て、いまにみ前をゆるさるゝことなきなと申侍侍（ママ）なれは、右は、おりゐ給てたに、神やいさめんと猶あかめきこえ給ふるに、左は、まさしきいかきのうちなれは、そのをそれなきにしも侍らしと、わつかにをしはかられ侍るはいかゝ。おほつかなしや」（21オ）

八番

左　伊勢　　持

右　明石上

左は、七条の大后宮につねは侍しにや、寛平の御門おり〳〵御覧しけるか、王子一所うみ奉りけり。やまと哥の道におさ〳〵聞え侍るとなり。このみちは秋つ嶋のみのりなるかゆへに、その人のめいほくならすといふことなし。伊せ物かたりといへる事は、かの女のかきえらひて、宇多のみかとに奉けるよし、題号につけてつたふる人も侍るとかや。猶はなはたしき」（21ウ）ほまれなるへし。右は、ちゝはりまのかみ、すみはてゝも猶いかなる心かまへにや、此うらをさりやらす、後の世のみちふかうつとめすみけるに、むすめ一所も給へり。いといたうかしつきけれは、京にも聞つたふる人は、いかにしてか此人をえめと、戀しのふかたこゝら侍るめれと、われこそかゝる海つらにしつみもはてめ、なへてのむす（こ）をはとらし、さるへくは、なか〳〵うみに入てよなと、こしらへをきけるに、源氏の君、すまにうつろはせ給を聞傳て、いかなるたよりにつけてか、此うらにひきわたし奉らんとおもふに、此ほとのたかしほに」（22オ）御たひ所のさまもをしはかれ侍れは、ちいさやかなるふねして御むかへ（へ）にまいる。源氏もさる夢のさとしもおはせしにや、うつゝにあはせ給て、うらつたひし給。入道は所につけたる御すみかのさま、心のかきりきよらをつくして入奉る。あちきなき御つれ〳〵に、御ことの音にたてそへ給そ、いと物はかなしかりける。ある時入道まいりて、ひはのてひとつふたつ、いとおかしうひきて、御ことなとすゝめ奉て、かゝる物の音は女のひきたるこそ心はすみ侍れなと、やう〳〵むすめのこと、ほのめかしきこえける」（22ウ）そ、いとかたはらいたき。やかてむすめのもとに御文あり。

をちこちもしらぬ雲井をなかめわひかすめるやとの木すへをそみる（とふ）、うちつけなれはにや、御返事申さゝめ（ゝ）れは、入道かはりて、

なかむらんおなし雲ゐをなかむれはおもひもおなしおもひなるらん、又源氏、

いふせくも心に物をなやむかなやよやいかにと問人もなみこのたひはと、むすめの御返事、

おもふらん心のほとよやよいかにまたみぬ人をきゝかなやまむ、むすめをは、たかしほのおそれに」（23オ）さしはなちて、をかへの宿にすませしにや、源氏おはしまして、ことなとひきあそひ給にも、物ことに都の御かた〳〵にも、けおさるへうも侍らすもてはやされ給。又のとしの八月には、めしかへされ給。女君たゝならすおはしけるを御覧しをき給けるそ、御心

くるしき。かたみにひき給へとて、御ことなとのこし給へは、
なをさりに頼めをきける一ことをつきせぬ音にやかけてしのはむ、あかしには、女君うみ奉り給へは、御めのとなとくたし給て、はこくませ給」（23ウ）後は都にうつし奉て、御むすめの君は紫上○（ノ）やしなひにて春宮へまいり、くにの御はゝとならせ給。めてたき御すくせ成けり。此番、いつくをし○（ゆ）うともおもひわかれ侍らす。右は、おほろけならぬかたにいひとられ、御子のすゑまてさかへのほり給御とくにまかせ、左は、さえのいとあさからす世に名のたかきかたにひかれ侍れは、なすらへて持なとにもや侍るへき。

九番

左　有常娘姉君　勝

右　空蟬君（君は）」（24オ）

左の○、物語のうへにも、いつれやらんとおもひたとられ侍りぬ。初の段にほの〳〵みえ侍て、するに女はらからふたり有けり。独はいやしきおとこのまつしき、ひとりはあてなるおとこもたるなと侍り。いやしきおとこもたる、しはすのつこもりにうへのきぬをあらひてと侍めるは、ふるきことはに、こゝにわかわたくしをあらひ、こゝにわか衣をあらふといへる古語の心なとにもや。此段の心さしあさはかにやは見侍らん。女は、わかせをおもふを、かしこきにはすなれは、時にしたかへる心、むかしのことはにもかよひ侍るにこそ。ろうさうのきぬ」（24ウ）は六位のなとにや。されはいやしきとはいふなる○（に）こそにや（ぃ）。

紫のいろこき時はめもはるに野なる草木そわかれさりける、

右、うつせみは、中河のわたりにすみけるか、たひ〳〵の御かたたかへも下の心なきにしも侍らす。やり水なとのすゝしきにことよせ給ふにや、かのこ君そ道しはし奉る。ある時おはしけるに、女のねやもいとちかうやとし奉れは、さしのそき給ふに、まゝむすめと、こうちけるに、はてぬれは、とをみそなといひて手をおりけれは、あるしの女、いよのゆけたもよみつくしてんやとて、わらひしなり。いつとても女はいとおほと」（25オ）かに、空おそろしきことをおもひ、とをゝ（ぃ）をひとつそこたへまほしう思給へられ侍る。此物かたりやらん、あふみの君とかいひし人の、すくろくうち給へしに、まけめなとにもや侍けん、さいとりあけて、かろらかにをしもみて、おもてうちさゝけ、せうさい〳〵と、したとにことはやうこひけるを、ちゝのおとと、物こしに見給て、こゝちはつかしう、あなうたて〳〵とつまはしきして、にけ給ひしと侍るもことはりならすや。さて其夜は、うつせみのもぬけとかやなり侍しを、むすめのみねのこりけるに、心ならすあひみ給。けんし」（25ウ）

ほのかにも軒はの荻をむすはすは露のかことをなにゝかけまし、むすめ、

ほのめかす風につけてもした荻のなかはゝ露にむすほゝれつゝ、ぬきすへしけるきぬをとりかへらせ給て、朝にかへすとて、

うつせみの身をかへてける木のもとになを人からのなつかしきかな（二字分あき）御返事、

うつせみのはにをく露のこかくれてしのひ〳〵にぬるゝ袖かな、伊予のすけうせて後は、めし入給て、あまたのかすにさふらはせ給とかや、右も心」（26オ）あた〳〵しきかたにはきこえ侍なる物から、人からも伊予のすけなとにむすほふるへき

ならぬを、おやなともなう、たよりをうしなひて、かゝるかたにむもれゐたるなるへし。なみ〳〵の人にしもおはさゝめれは、おもはすにたちよりゐ給はゝ、あなとも聲たてかたなるへし。左は、たとしへなう、かしこきかたに聞なされて侍れは、かちの字をくわへ侍るにこそ。

十番

左　中納言娘君

右　夕皃上　　勝」（26ウ）

右は、頭中将、雨夜の物かたりに、さる女にあさからすかよひて、子をさへうみ侍れは、になうおもひかはし侍しを、家のめなむ、ゝくつけきことをいふと聞て心とはひかくれて、いつちぬらんと○しらす侍るなり。その子の名をは、なてしこといひしなと、かたる。その人にや、まかりいてなむとて、かゝることをかきてをきけるとかや、

山かつのかきほあるともおり〳〵はあはれをかけよなてしこの露、うせ給ひしせんほうのみやすん所、六條わたりにおはしましけるに、けんし」（27オ）しのひ〳〵にかよひ給。第二の御めのとれいならす侍て、五てうなる所に侍しを、とふらひ給はんとておはしけるに、下の心なきにしもおはしまさす。かへらせ給道のほとに、きりかけたつこ家にしろき花のさきかゝりけるを、御ともの人めして、折て奉れとの給ひしかは、これみつ、なにその花そと申侍れは、うちより、これなむ夕かほといへり。えたも、いとなさけなかめるに、これにすへて奉れとて、あふきをさしいて侍けるを、とりて見給へは、

心あてにそれかとそみる白露のひかりそへたる」（27ウ）

ゆふかほの花（二字カあき）御返し、

よりてこそそれかともみめたそかれにほの〳〵みえし花の夕かほ、御車とゝめて、あるしの名をとはせ給へは、これみつ、陽明介か家に侍る也。あかたにまかりてなと申けれは、こよひはとゝまり給。八月十五夜のことなるへし。となりの家にからうすなといへる物の聲、みたけしやうしんのをとして、なも當來導師とおかむなるも、○御みゝいとかしかまし。こゝは物むつかしきとて、ひとつ車にてなにかしの院へいさなひ給に、わかまたしらぬなとの給し御返しに」（28オ）

山のはの心もしらてゆく月はうはの空にてかけやきえなな、此所はあれはてゝ、けに松桂にふくろうなき、らんきくにきつねすむさま也。夜ふけはてて、こたまとかいふものゝきたりて、女君をとり奉る。源氏はあきれまとひて、たちをひきぬき、もとめ給へとも、めにもみえす。火もくらうなりて、物のあしをとのみせし也。これみつとめしけれは、又そらにていふなりけり。又ひかゝけてみ給へは、からのみなりけるそ、いとせんかたもなき。此所は、むかし、宇田のみかと、みやす所なとひきゐ給てあそひ給」（28ウ）けるにも、さる物の○有けるなと、後にそ、くひかなしみ給ふ。ひかし山六道のまへまて、ひとつ車にてをくり奉り給。けふりとなし侍そ、夢の心ちし給。とのにかへりおはしまして、

みし人のけふりを雲となかむれはゆふへのそらもなつかしきかな、かのめのとに右近といひしを、御かたみにとめしをかせ給ふ。（二字カあき）左の君、むかし氏のなかに御子むまれ給ふ。御おほちかたにて、中将、

我門にちひろあるかけをうへつれは夏冬たれかかくれさるへき、ありはらは、わうしをいてゝ」（29オ）いくはくの世をもへさるに、かくまておとろへはて給ことを歎きくらし給。あにおとゝ、ひきゐて布引のたき見にまかりて、衛ふのかみ、

わか世をはけふかあすかと待かひのなみたのたきといつれたかけむ、又あるし、

ぬきみたる人こそあるらししら玉のまなくもちるか袖のせはきに、かうまてうちなけかるゝ世の、おもはすも御子むまれ給へれは、けにたのもしき御おひさきなるへし。此さ右、又いかにそや。右の上は、心いと花やかにえんなるかたの、又なうきこ」（29ウ）え、左は、なたかう時にあへるさまのみえ給ふるを、これはさたかすのみこなり。時の人、中将のことなむいひけると、おもてにあらはれ侍れは、ふるき人のふてのあと、けちかたきわさに侍めれは、をのつから右を勝にと申侍るならし。

十一番

左　染殿内侍

右　蓬生君　持

右は、父宮の御ゆつりをたかへす、此宮にすませ給。源氏、なつかしきことにおほして、いひよらせ給。御心」（30オ）いとうこきなう、しちようなるかたにおはしまして、御かたちなともなみ〳〵の人にはいはれ侍らぬ物から、いさゝかをくれ給かたもくはゝりおはせしやらん、すまの御旅ゐなとにも、人〳〵の御かすにもとりわきたるかたには思ひもよそへられ侍らさめれは、御心と身をおとしめ給て、とふらひ給こと、おさ〳〵まれなるにや。かへりてもかたみにふともえ音つれかはし給はす。宮はよもきむくらのあらそへるまゝに、ろうなとも雨露にもりくちて、のこれるかたにしたかひて、かた〳〵よりすみ給ふさまなり。ちゝの御たからなとは、山ことならす」（30ウ）つみかさね侍しも、みなくちうせて、その物とさへ見わかれ侍らぬほとにや。つかうまつりし人もかつ〳〵こほれちりて、したしきかきり、ひとりふたりそ、とゝまりける。しゝうの君とて御めのとやうにて侍しも、つくしの大貳になりてくたりし人にいさなはれけれは、君、

たゆましきすちをたつねし玉かつらおもひのほかにかけはなれぬる、侍従、御返し、

玉かつらかけてはやまし行みちのたむけの神もかけてちかはん、又のとし、源氏、物のよすかに」（31オ）おほしいててをはしけれは、よもきかそまのいふせきに、道さへたとられ侍けれは、源氏、

尋てもわれこそとはめみちもなくふかきよもきかもとの心を、かくてすみ給御さま見たてまつり給て、此ほとのと絶さへうらめしうおほして、みさうより人めして、有へきかきりとりつくろひて、めのまへのむかしとなし給。あまたの人なとよひとりて、かみなかしもさふらはせ給。のちには六條院へうつし奉りて、とりわきてあつかひきこえ給とそ。（二オ欠あき）左は、やむことなきかたに」（31ウ）きこえ侍しに、中将、あさからすまかりかよひけるか、子ある中なりけれと、世のならひかれ〳〵さまになり侍て、又人のかよふと聞えけれは、

秋の夜はは日わするゝ物なれやかすみにきりやちへまさるらん、女、かへし、

千ゝの秋一つの春にむかはめやもみちも花もともにこそちれ、此つかひ、いつれをそれと申定侍らん。右、よもきふのやとりにたへすみ給へらん心さし、哀にもかしこうもおもふ給へ侍るを、左も、きは〳〵しうえんなるかたはをくれてもみえ」（32オ）侍らぬうへ、こゝをとなむすへきふしも侍らねは、持なとにてもや侍るへき。

十二番

左　初艸君

右　玉鬘内侍　持

左、いもうとのおかしけなるを見て、

うらわかみねよけにみゆるわか草を人のむすはむことをしそ思ふ、女、返し、

はつくさのなとめつらしきことのはそうらなく物をおもひけるかな、此言にとりて、女を」（32ウ）けさうしたるかたにいひな○らふるかたも侍るやらん、はらからのなからひも、そのれゐすくなからす侍るめれは、さにや侍らんなれと、ふかういもうとをあはれふさまにも見え侍らすや。又、末の段にふち原のとしゆきといふ人よはひけり。またわかけれは、ふみもおさ〳〵しからす、ことはもいひしらす、いはんや哥はよまさりけれは、あるしの人、あんをかきてと侍り。

つれ〳〵のなかめにまさるなみた河そてのみひちてあふよしもなし、かへし、おとこ、女にかはりて」（33オ）

あさみこそ袖はひつらめなみたかは身さへなかるときかはたのまむ（一字分あき）右のなひしは、いはけなきほとに、めのとにくして、はるかなるせかひに行かくれ給。やう〳〵におとなひ給まゝに、此君をえまほしういひわたる人もおほかりけれと、かゝるあさましきかたには、むもれしつみもはてさせ給はし。いかにもして都にいさなひ奉て、ちゝおとゝにもまかせ奉らんなと、いひ〳〵せしほとに、めのと、いたつらになりぬ。その子なむ、ほいたかはすひきゐ奉りてのほる。ひゝきのなたをすくとて」（33ウ）うきことのむねのみさはきひゝきにはひゝきのなたもさはらさりけり、都にも、それさともとめよるへき人もしらせ給はねは、まつはつせへまうて給てあひ奉りて、みちしはして、源氏の御やしなひにてうつりておはしましぬ。さてうこん、

ふたもとの杉のたちとをたつねすはふるかはのへに君を見ましや、こと、ひはなと、源氏、ひたすらにをしへきこえ給。かの君のあにの中将なとにも、よきむすめたつねえたりとほのめかし給へは、いつくならんと床しう思て」（34オ）

おもふとも君はしらしなわきかへり岩もる水の色しみえねは、なとよみ侍けるに、のちにそかたり給て、わらはせ給ける。さて源しも、おり〳〵はけしきはみ給ことも侍れとも、しらすかほにもてなひすくし給へは、

おもひかねむかしのあとをたつぬれはおやにそむけるこそたくひなき、女、かへし、

ふるきあとたつぬれとけになかりけりこの世にかゝるおやのこゝろは、かく侍れと、つれなくてははて給はしと、さすかにをしはかり」（34ウ）侍りぬ。しらすかし、ひけくろの大将の北のかたになりて、あまたの御子うみ給て、いとかぎりなき御さかへなり。此番、又、左は、たとへけさうのかたにいひとらるとも、まさしきこのかみにつけては、なひくけはひの侍ら

さめるも、そのことはりなきにし侍らす。右は、又、まことの御むすめにもあらさめれは、うけひきさふらひ給はんも、つみなるまてはあらしかしなれは、なすらへてよき持にこそ侍らめ」（35オ）

左方

五条大后宮　忠仁公良房女
二条大皇大后宮　贈大政大臣長良卿女母總繼女
有常女君　母良門女
戀死君　三条右大臣良相卿女
夢語君　右兵衛督紀名虎女
小野小町　出羽郡司小野常削（タカママ）
齋宮女御　文徳天皇御女
伊勢　伊勢守継蔭（ママ）
有常女姉君」（35ウ）

染殿内侍　良相女
初草君　阿保親王女　平城天皇御孫

右方

桐壺更衣　大納言女
薄雲女院　先帝御女
紫上　兵部卿宮女
葵上　引入大臣女
朧月夜内侍督　弘徽殿御妹」（36オ）
女三宮　朱雀院御女
槿齋院　式部卿宮女
明石上　前播守（ママ）女
空蟬君　大納言（ママ）女
夕皃上　母（ママ）三位中将女
蓬生君　常陸宮女
玉鬘内侍　致仕（チシ）大政大臣女」（36ウ）

〔付記〕

前掲の拙稿で、『伊勢源氏十二番女合』の成立については大勢にしたがい、不用意に「鎌倉時代の成立と考えられている」と述べたが、尾田敬子氏「『伊勢源氏十二番女合』の成立基盤」（『国語国文』一九八五年十一月）に学びつつ、現在では、室町後期、十五・六世紀の成立と考えている。成立や諸伝本間の関係等は、別稿を準備中である。

（なかしま　しょうじ）